

母の召天

私の母、林許^{はしえ}愛枝は、2月18日午前12時5分に、平安のうちに天に召されました。88歳の天国への凱旋でした。

カリフォルニア時間の2月17日日曜日の朝、弟から母が亡くなったという電話があり、すぐに飛行機切符を手配し、夜中の便で日本へと発った。日本時間19日の午前5時に羽田に到着し、迎えに来てくれた弟の車で秦野市にある両親の家に向う。外は冷たい雨が降っている。運転している弟の仁も、義妹の敦ちゃんも、ずっと寝ていないのだろう、疲れた表情が全てを語っているかのようだ。母が亡くなる数時間前まで病院にいた弟達が帰宅して直ぐに病院から電話が有り、亡くなったと知らせが入ったそうだ。そのまま病院にとんぼ返りとなり、朝方の3時過ぎに秦野市の念願の自宅に戻った。去年の3月22日に母は米寿のお誕生日を迎え、家族全員揃ってお祝いした。3年前にアルツハイマーと診断された母は、その時はまだ父の家から歩いてすぐにある、「桃の木原」と言うアルツハイマー専門のセンターに住居していたので、センターの方が自宅まで送って下さり、車椅子での移動で楽しく自宅で家族全員に囲まれ、満面の笑顔だった。それが母が自宅で過ごした最後の時となった。私のどこかに「これが最後の誕生日祝いになるかも知れない」という気持ちがあった。今から思えば、無理をさせてでもニューヨークの次男、台湾在住の長男家族を日本に行かせて正解だった。

半年前に軽い脳梗塞の為、「桃の木原」から日赤に暫く入院し、食べ物が飲み込めなくなった母は、大好きだった「桃の木原」には戻る事ができず、長期滞在の病院に入った。去年の10月に母に会いに行った時は、鼻から管を入れた痛々しい母の姿を見て、解ってはいたものの、やはり辛かった。元気で、食べる事が大好きだった母にとって、こんな形で生きていたくないだろう、とまで思ってしまった。私は、何も言えずに遠くを見ているような目をしている母を、抱きかかえるかのようにして語りかけた。「ママ、私よ、芙美だよ、わかる？大丈夫、もう何の心配もいらなからね。安心して天国に行ってもいいよ。一生懸命私達を育ててくれてありがとう。」その瞬間、母の目が私をしっかりと見つめてくれた。母の目から溢れる涙を静かに優しく拭いてあげながら、私もしっかりと母の目を見つめて何度も何度も頷いた。それが母との最後の会話となった。

思ったよりも車は渋滞していたので、秦野市の両親の家に着いたときは既に午前8時過ぎだった。父が緊張した面持ちで出迎えてくれた。台湾の風習で、親の死に目に間に合わなかった場合は、家の入り口から跪き、這って亡くなった親の所まで行く。父に言われてすぐに跪き、一番奥の日本間に寝ている母の亡

骸まで這って行った。母は布団に寝かされ、白い布が顔を覆っていた。静かに布を取る。母には似ていない母の顔が見えた。私は、母の亡くなった知らせを受けてからずっと、母の死顔を見た時に自分がどんな反応を示すのか我ながら心配だった。意に反して、私の心は静かで穏やかだった。まるで母が私の中に一緒にいるかのように、母と二人で母の死顔を見つめながら、「似ていないわねえ」とお互いに会話しているかのような、不思議な感覚だった。既に天国で痛みも無く、飛び回っているだろう母の姿が目に見え、好きな花作りを思いっきりしたらいい、もう腱鞘炎もしっかり直っているから、編み物だってまたできる。

暫くして葬儀屋が見え、告別式の最終打ち合わせに入った。不思議な事に、担当の方が、「お母様のお顔を拝見したら、紫がお似合いになると思われましたので、紫の幕を用意しましたがよろしいでしょうか？」と聞かれた。紫は母の大好きな色だった。牧師先生夫妻とも連絡をし、告別式の後の火葬場の事やその後の食事の事等、義妹の敦ちゃんが本当に何から何まで一生懸命やってくれている。父は書斎から古いアルバムを沢山出して来て、これらをどこかに置きたいと言う。告別式の日には食堂の円テーブルに私が飾る事になった。そうこうしているうちに午後になり、弟夫婦は疲れているので家に帰ってもらい、私と父はやっとゆっくり腰を下ろした。外は雪が降り続けている。もう今日は誰も来ないだろうと思っていたら、母のヘルパーさんだった方達が、母に最後のお別れをしに寄って下さった。夕方近くに親友の雅代から電話が入った。告別式には来られないから、今から来るという。遠くから雪の日に大変だとは思ったが、気持ちがありがたかった。雅代は彼女のお姉さんと一緒に、6時過ぎに着いた。我が家では「長女B」と呼ばれている私の親友は、玉川学園の小学部からの「腐れ縁（喧嘩ばかりしていたので、彼女の母が私達の仲をそう呼んでいた）」で、あの頃は家も近所だったので、毎日喧嘩しながら一緒に学校に通い、家にも良く泊まりに来て、私の小さなベッドと一緒に寝た仲だ。彼女は母の冷たくなった顔を暖めるかのようになでながら最後の挨拶をしてくれた。彼女達が帰った後も、近くにすんでいる台湾の遠い親戚が訪ねて来たり、皆さん寒い雪の中を本当に良く来て下さった。弔問客も全て帰り、夜も更けて来た。私は父に頼まれていた、告別式での追悼文を書き始めた。ここにその追悼文をそのまま掲載させて頂く。



全てに時がある、生まれるにも、死ぬにも時がある、と言う聖書のみ言葉があります。私の好きなみ言葉のひとつです。弟から電話をもらった時、カリフォルニア時間でお昼前でしたから、日本時間は午前5時前に違いなく、即母のことかな、と思いました。病院から弟に電話があり、血圧が下がって来たから家

族にきて欲しいと言う依頼で、これから病院に行くからまた病院から電話します、という内容でした。2時間後に病院から電話があり、その時弟が病院の許可を得て、病室で携帯電話を使用できるようにしてくれたので、私は弟の携帯電話を通して母に語りかけ、お祈りをしました。今思えばそれが最後になってしまいました。その時、私ははっきりと母が天に召される時が来たことを感じていました。弟も義妹の敦子さんも、本当によくやってくれました。特に嫁の敦子さんは、何から何まで心を配り、こんな素晴らしい嫁に世話をしてもらって、母は幸せでした。この場をかりて敦子さんに御礼を言います。ありがとうございました。

母は、決して優しいおかあさんのイメージではなく、私は厳しく育てられました。時にはその厳しさに反抗し、憎まれ口を聞いたこともありました。母は決して私の憎まれ口に怯むことなく、厳しい母親役を全うしました。高校卒業後、家を離れて台湾の大学に入った私は、母の厳しさを始めてありがたく思ったのです。母は、私がどこに行っても自信を持って生きていける女性に育ててくれました。結婚後アメリカに移住した私は、長男を出産し、始めて母親の大変さが身にしみました。夜中に、どうしても泣き止まない生まれてまだ一ヶ月も経たない長男を抱きながら、アパートの台所の床に座り込み、泣きながら母に国際電話を掛けたことを思い出します。「どうしたの、今そっちは真夜中でしょう？」と、泣いている私にびっくりして母が聞きました。私は息子の泣き声よりも大きな声で泣きながら、「ママ、この子が泣き止まないんだよね、熱もないし、おむつも濡れていないのに。親になるって大変だね。昔何も知らずに、憎まれ口を聞いたり、反抗してごめんなさい」、と謝った事を思い出します。私がアメリカに発つ時、羽田空港で、母はこう言いました。「ママは娘を遠くに嫁にやるために育てたんじゃないよ。でも芙美が自分で決めた道だからしっかりやりなさい。祈ってるからね。」その言葉にどれほど支えられた事が分かりません。そして母も自分の年を感じるようになって来た頃でしょうか、里帰りした私にこう言いました。「あなたがあちらで周りの人たちにできる限りのことをしてあげれば、誰かが、同じようにこちらで、ママに良くしてくれると思ってね。」私は、ママのその言葉のお陰で、お年寄りが自宅で安心して暮らせるネットワークを立ち上げました。きっと母は天国で見守っていてくれます。そして私を励まし、支えてくれるでしょう。今、私に示された時は、母が教えてくれた一つ一つの事を、大切に心に止めて全うする時が来たのだと思います。天国で再会する時に母が笑顔で「よく頑張ってきたね」と迎えてくれるように毎日を生きて行きたいと思います。ママ、心からありがとうございます。厳しさの中に温かいママの愛が沢山込められていたこと、よくわかってます。もう何も心配することなく、安心して天国で待っていてください。

ここまで一気に書き上げた私は、この文章を父に呼んで聞かせながら、最後に何か付け加えたいのに、どうしてもその言葉が浮かんで来ないと言った。父は、もうそれでいいんじゃないか、と言ってくれたが、私は納得がいかず、母の部屋に行き、母のいつもの場所に置いてある聖書を持って来た。聖書には葉が挟んであり、そのページを開けると、ある箇所に線が引いてあった。きっと母が好きだった聖句なのだろうと思いながら目を止めると、詩篇の16篇、8節と9節だった。母の聖書を用いるとこう書かれている。

わたしは常に主をわたしの前に置く。
主がわたしの右にいますゆえ、
私は動かされることはない。
このゆえに、わたしの心は楽しみ、わたしの魂は喜ぶ。
わたしの身もまた安らかである。

この母が贈ってくれたに違いない聖句が、正に私の追悼文の締めくくりとなった。母は平安に天国に行った事を私達に聖書を通して教えてくれたのだと私は確信している。

母の告別式は、母の大好きだった紫色の幕が貼られ、沢山のお花に囲まれて、本当に美しく穏やかな、天国への見送りの日となった。母の大好きな讃美歌を歌いながら、弟はただ泣きじゃくっていた。母への言葉を述べた私は、最後の母の聖書を手に、詩篇の16篇、8章と9章を読んだ。私に続いて、義妹の敦子さんが母との思い出を語り、その後甥の隆文が、アマー（台湾語で祖母という意味）が自分にしてくれた事、そしてアマーが亡くなったその日の夜、隆文の夢に現れ、公園のベンチに座っているアマーが、隆文に「ありがとう」と言ってくれたのに、自分は驚くばかりで気の聞いた言葉もでなかった、だからこの場を借りてアマーに御礼を言いたい、と話した後、後ろの棺に一礼し、「アマーありがとう」、と頭を下げた。

私の両親は今年で結婚60周年を迎える。父は告別式の始めから終わりまで静かに座っていた。ずっと無言のままだった父が、告別式も終わり、母の出棺の前、再び棺を開けて奇麗なお花で母を飾った後、棺の蓋をした時、父は静かに一人で母の眠る棺の前に直立不動し、ゆっくりと、深くお辞儀をした。そして静かに「ありがとうございました。」と言った。

焼き場で母の骨を見た時も、ちっとも悲しくなかった。その時私は気がついた。愛する人との関係は、決して物理的なものではなく、霊的に繋がっているのだと。母はこの世にもう形は無い。しかし母はいつまでも私の母として心の中に

生きて行く。それは目に見えないイエス様を私達が信じるという事と同じなのだろうか。そう思うと、本当に天国に母がいるお陰で、まるでイエス様が身内のように思われて来た。

母の遺骨は5月に生まれ故郷の台湾で納骨する事になった。去年の3月に母の米寿のお誕生日を祝ったように、ニューヨークから、カリフォルニアから、日本からと、家族全員が、今度は台北に集り、台湾の親戚友人も参加して追悼式を行う。その後、皆で母を田舎まで送り、林家の納骨堂に母を安置する。私にとって、母の遺骨が何処にあらうと、母は私の心の中に永遠に存在して行く事には変わりはない。

厳しかった母なのに、今思い出す母は、アルツハイマーになった後の子供のような笑顔の穏やかな母である。

